

涙のバレンタイン
Charley

どうしてこうなってしまったんだろう。
受かると思っていなかった、百合ヶ丘のセレクション。その合格通知が届くに至って、ついに退路を断たれてしまった。
その、百合ヶ丘受験を、中でも一番勧めてきたのが、ルームメイトの睦。
やっぱり、彼女のことは、わからない。ガーデンから指名されたルームメイトとはいえ、長いこと、一緒に過ごして、わかったつもりでいたけれど、それは単なるわたしの思い込みだったみたい。「来年も、高等科でも一緒だよ」
って、言ってほしかった。でも、そうではなかった。
嫌われてたのかな。それとも、わたしのことなんか、なんとも思っていなかったのかな。
でも、わたしに百合ヶ丘への進学を勧めたあとも、わたしに接する態度は、それ以前と全然かわらない。だからやっぱり、睦のことが、わからない。
そんな睦と、どう向き合っているのか、よくわからなくて、どうしてもぎくしゃくしてしまう。睦はなににもかわらないのに。

明日は2月14日。
睦がいない寮室で、午後の日差しが部屋に差し込む中、ひとり調理器具と材料を広げる。
去年は、睦と一緒に、チョコ、作ったっけ。
ひとりでチョコをちゃんと作って、睦に渡せたら、なにかいろいろうまくいくような、そんな気がして。
実際には、なにが起こるでもないのだろうけれど、そう、思いたくて。
大丈夫、やり方はちゃんと、わかってる。

※ ※ ※

買い物の会計を済ませながら、ひとり部屋にいるであろう三一七さんのことを、考える。
かつては、誰かの不幸な未来が視えた時には、それを回避するような警告をしてきた。
では、幸せな未来が、視えた時は？
支払い済みのカゴから袋詰めする手が止まる。
その、幸せな未来の中に、自分がいなかったとしたら……
その視えた未来を変えてまで、自分がある未来を目指そうとしない自分は、少し臆病なのかもしれない。
それに、三一七さんが、御台場に、あってないのは、例え未来を垣間見ていないとしても、本人以外には、誰の目にも明らかなんですもの。

※ ※ ※

チョコを菜切包丁で細かく刻んで、同時にお湯を沸かす。
刻んだチョコは、ボウルに入れて、さらに沸かしたお湯の鍋にボウルを入れて、生クリームを加えながらへうでかき混ぜてチョコを溶かして行く。

それは、ごつごつとした茶色の塊と油に分離してしまった。気を付けてやったつもりなのに！温度が高すぎたんだ！
ペタン、と床にへたり込む。
分離したチョコレートは、もう、元には、戻らない。
わたしと睦の仲も、もう、だめなのかな。

※ ※ ※

どれくらい、そうしていただろう。

がちゃり、と寮室のドアがあく。ビニール袋を提げた、睦だ。

「あらあら、どうしたんですか、明かりもつけないで」

と、お部屋に入ってきて、ぱちん、と電気をつける。

私は、睦の方を向く。でも、それ以上なにも出来ない。しゃべれない。

睦は、私にどんどん近づくと、わたしの前で膝をついて、わたしの頭に、持っていたビニール袋を、がさっと置く。

「これ、いると思って」

それは、板チョコ。

「今年も、一緒に作りましょう？」

わたしは、睦にすがりつくと、泣いてしまった。ただ、声をあげて、泣き続けてしまった。

※ ※ ※

どうするのが正しいのかわからなくて、私の胸に縋り付いて泣きじゃくる三一七さんの頭を、やさしく撫でる。

三一七さんは、頭を撫でられるのが、好き。それは、私だけが知っていることだから。

END

(2024/02/12 v0.1 初版)